

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

植物の好きな人は花を花瓶に^{かびん}活けて楽しめます。でも水につけておくだけでは、あとは花びらが散るのを待つだけです。ら、もう少し植物の好きな人は「鉢物」^{はちもの}を好みます。鉢に植わった植物は根を張っていますから、花瓶の花と違って育ちます。葉を開き、つぼみをつけて、花が咲いてゆくようすを見るほうが、はるかに楽しめます。サクラソウの場合、水を好むので、冬のうから水の管理をするなど、手をかけて育てますから、春に葉を出してつぼみをつけたときの喜びもひとしおです。

しかしそうして手入れをしても、そのままでは株の寿命^{じゅみょう}が来れば枯れていきます。その点、受粉して種子ができれば、繰り返し育て、増やすことができます。

鷺谷^{わしたに}いづみ先生はサクラソウの研究をして、たいへん重要な発見をしました。それは、大きなサクラソウ群落^{注1}ではたくさんの種子ができていたのに対して、群落が小さく、しかもまわりにほかのサクラソウ群落がない場合には、花は咲いても種子ができていなかったのです。株の大きさや葉の状態にはかわりがなく、小さな群落でも光合成などは順調におこなわれていて、花もちゃんと咲いているのに、フシギなことでした。

鷺谷先生たちは調査をした結果、その原因をつきとめました。それはトラマルハナバチ^{注2}というハチが送粉するしくみにありました。

① サクラソウの送粉はほとんどこのマルハナバチによっておこなわれます。サクラソウはその名前の通り、サクラと同じく五枚の花びらを持っています。その花びらの下に細長い筒^{つつ}があって、蜜はその底にあります。そのため、太くて短い口を持つハエなどは、サクラソウの蜜を吸うことができません。また、繊細な花^{せんさい}なので、昆虫^{こんちゅう}がとまると、花を支える柄^えがその体重でしなって、花は下を向いてしまいます。それでも蜜を吸えるのは、敏捷^{びんぎょう}で長く丈夫な口^{じょうぶ}を持っているマルハナバチだけなのです。

マルハナバチが暮らすためには、春から秋までずっと蜜を吸いつづけなければなりません。そのためには、早春しか花を

咲かせないサクラソウがあるだけでは不十分で、そのあとも次々にいろいろな花が咲きつないでくれないなりません。

A、多様な花を咲きつぐ、ユタかな群落が必要だということです。また、マルハナバチは林の地中にあるネズミの古巣^{こそう}などを使って巣を作りますから、ネズミなどがあるよい林も欠かせません。

サクラソウ群落が小さくなると種子ができなかった理由のひとつには、群落が小さくなると花の数も少なくなり、大雨や乾燥^{かんそう}などのちょっとしたイヘン^{いへん}でも全滅^{ぜんめつ}しやすいということがあります。そして、さらに重要なことは、実際に小さな群落^{せうらく}を観察してみると、そこには送粉者であるマルハナバチがホウモン^{ほうもん}していなかったということです。他と離れてポツンとした小さな群落には、マルハナバチも来てくれないようです。

この調査は北海道でおこなわれました。北海道の牧場では、家畜^{かちく}にもよくないために、殺虫剤^{さつちゅうざい}が使われませんから、マルハナバチはわりあい元気に暮らしています。それでも、群落が孤立して小さくなるとマルハナバチは来てくれないのです。本州やそれより南では開発がはるかに進み、湿地^{しつち}は開発によって直接破壊^{はかい}され、北海道にあるような大きなサクラソウ群落はほとんど残っていません。B、田んぼや畑では害虫を殺すために殺虫剤を使うので、マルハナバチも無差別に殺してしまいます。それに加えて、残っていた群落もマルハナバチが来ないため、あるいはマルハナバチが来ても隣の群落まで遠すぎるために送粉してもらえず、種子ができないということが起きているのです。

このことはとても重要なことを教えてくれます。光があり、水があり、栄養があれば植物は育ちますが、サクラソウが生き続けるためには、それだけではだめだということです。送粉してくれるマルハナバチがいなければならず、マルハナバチが生きるためには、さまざまな花が咲きつないでくれる多様な群落が必要なのです。

ということは、サクラソウを鉢で育てればよいという考えは、まったく不適切であるということです。湿地を守ればよいというのでは不十分です。背景になる群落、ネズミもすめる林、そうしたものがばらばらにではなく、まとまってハイチサ^{はいちさ}れていなければならぬのです。逆に言えば、健全なサクラソウ群落があるということは、こうしたことがすべて満たされているということを示しています。サクラソウ群落がたくさんあったかつての日本は、そうしたすばらしい自然を持っていたということです。C、それは、太平洋戦争のあとに急速に失われてしまいました。

動物の絶滅の話の中にサクラソウを紹介しましたが、動物でも植物でも考え方はまったく同じです。

(高槻成紀『動物を守りたい君へ』)

注1 群落Ⅱ植物が[●]一か所に[●]むら[●]が[●]って生えているところ。「サクラソウ群落」といった場合、サクラソウだけが生えているわけではない。

注2 送粉Ⅱ植物の花粉を運んで受粉させること。

注3 柄Ⅱ花や実を支えるための茎のこと。

注4 敏捷Ⅱすばやいこと。

問1 ~~~線①②③④⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 A C に入れるのに最も適当なことを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア しかも イ 一方 ウ しかし エ つまり オ たとえば

問3 ——線①「サクラソウの送粉はほとんどこのマルハナバチによっておこなわれます」とありますが、それはなぜですか。サクラソウの特徴をふくめて七十五字以内で答えなさい。(、や。もふくみます)

問4 ——線②「小さな群落」とありますが、小さな群落にマルハナバチが来ないのはなぜですか。次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 小さな群落では花の種類が少なく、マルハナバチが長い期間蜜を吸い続けられないから。
イ 小さな群落では大雨や乾燥などの影響により、サクラソウの蜜がたくさんできないから。
ウ 小さな群落では花が絶滅しやすくなり、サクラソウが春にしか花を咲かせなくなるから。
エ 小さな群落では天候の影響を受けやすく、マルハナバチが巣を作ることができないから。

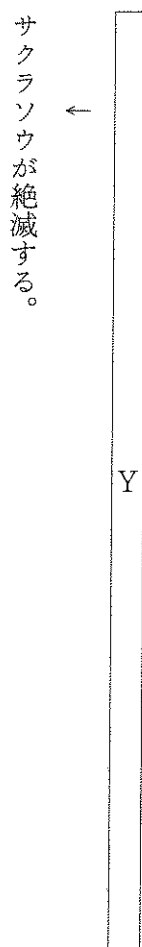
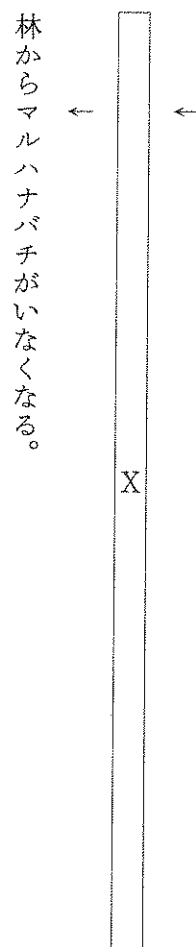
問5 筆者はこの文章の中で、サクラソウが絶滅しないために必要なものは何だと言っていますか。次のア～コの中から三つ選んで、記号で答えなさい。

ア マルハナバチ イ 多様な花を咲きつぐ群落 ウ 田んぼ エ 人間の管理 オ 湿地
カ 鈴 キ 家畜 ク ネズミの古巣 ケ 畑 コ 殺虫剤

問6

サクラソウ群落において、もし近くの林のネズミが絶滅した場合、どのようなことが起こると考えられますか。次のX・Yにあてはまる内容をそれぞれ三十五字前後で答えなさい。(、や。もふくみます)

ネズミが絶滅する。



問7

この文章のまとめとして、このあと筆者はどのような主張を行うと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 動物の場合は、植物と違って自分で住む場所を変えることができるため、絶滅を防ぐことが比較的簡単である。そのため、絶滅のおそれがある植物を早めに保護し、増やしていくための研究を積極的に進めていかなければならない。

イ 開発などによって、人間はたくさんの被害を動物や植物にあたえている。私たちの生活が便利になるためには仕方ないことではあるが、サクラソウを鉢で育てるなど、自分たちができることから始めて、自然破壊を食い止めていかなければならない。

ウ 生物は全て他の生物とつながって生きているため、ひとつの生物が絶滅すると、他の生物も絶滅することが考えられる。本当に動物を守るためには、生物同士が複雑なつながりを持っていることを正しく知り、そのつながりもふくめて守らなければならない。

エ 全ての生物の絶滅を食い止めるのはとても難しいことであり、不可能である。ひとつの生物を守るのに、どれだけの時間と費用がかかるかをよく調べて、どの生物を残し、どの生物を絶滅させるかを考えてから開発を進めていかなければならない。

〔二〕 次の各問いに答えなさい。

問1 次の各文の——線のことばを、() 内の意味になるように完成させなさい。ただし、空らんの中にはすべてひらがなが入ります。

〔例〕 彼女とは、前に何度か会っているのに、まるで初めて会ったようなしら□□□□あいさつをされた。(知っているが知らないふりをするさま)

答え

し
ら
じ
ら
し
い

- ① 彼女は自分の子供がうそをついた時には、たとえ小さなうそであっても強くたし□□□□。(よくない点に対して注意を与える。考え直すようにしかる)
- ② 寒い季節になっても、暖かい落ち葉の下にはまだたくさんの虫たちがうご□□□□。(絶え間なくもぞもぞと動く)
- ③ 春になって山々では、親鳥がひなを大切にはぐ□□□□姿が見られる。(養い育てる)
- ④ すばらしい作品を書き上げた若い作家を、世間はすぐにもて□□□□。(さかんにほめる)
- ⑤ この程度の暑さでへこ□□□□ようでは、まだまだ練習が足りないぞ。(元気がなくなる)
- ⑥ いつもは元氣いっぱいの子が校長先生を見たたん、しお□□□□顔になっていた。(ひかえめなさま)
- ⑦ せっかく忠告したのに、自信満々の彼は私に対して鼻であし□□□□ような態度をとった。(相手を軽くあつかう)
- ⑧ 夕方になるとおび□□□□数の鳥たちが、群れを作って山へ帰る。(たいへん多い)

問2 次の空らんに、文の意味が通るような漢字一字を入れなさい。ただしその漢字は後の語群から一つ選んで、漢字に直したものとします。(語群のことばは、一度しか使えません)

- (1) ① 食中毒の予防には、手洗いや食器の消毒などをして□□生を保つことが大切だ。
- ② 今日の図工の時間、私のクラスでは港の風景を□□生した。
- ③ あの動物園はお客さんに、動物本来の□□生の姿を見せている。
- ④ クラスのお別れ会で、みんなの思い出のビデオを□□生して見た。

語群

や さい しゃ えい

- (2) ① おさななじみの彼女とは、ずっと姉妹□□然の付き合いをしています。
- ② この教室は、いつも机が□□然と並んでいてすばらしい。
- ③ 言いづらくても親友なら、まちがいを注意するのは□□然だ。
- ④ 日ごろから運転ルールを確認していたので、事故を□□然に防ぐことができた。

語群

み どう せい とう

- (3) ① 自転車に乗っていたら、不□□に強い風が吹いてきて転んでしまった。
- ② 食事中に大声で話すのは周囲の人に不□□な思いをさせるので、絶対にやめなさい。
- ③ 期日までに宿題を出さないと、非常に不□□な立場になりますので、注意してください。
- ④ 今月に入って晴れたり雨が降ったりして、天候が不□□である。

語群

じゅん い り かい

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

上郷二中の弱小陸上部に所属する走哉は、練習中に遠くから自分たちを眺めている転校生、辻一心の存在に気付く。一心は陸上強豪校の笹木中で中距離走の選手として活躍していたが、ある事件をきっかけに走ることをやめてしまった。陸上部をばかにしていた一心であったが、だんだんと走哉の走りに心を動かされ、陸上部の練習に参加するようになった。

ある日、走哉が倒れてしまったことをきっかけに、練習法をめぐって陸上部員とけんかになった一心は練習の途中で帰ってしまった。

次の日、走哉は一心が部活に来るか、ちょっと不安だったが、グラウンドに出たとき、勝手にひとりでストレッチを始めている一心の姿を見て、ホッと胸をなでおろした。

今日、陸はパソコン部の日だ。陸がいないときはいつもそうなのだが、すうすうすきま風が吹いているような感じだった。陸はいっしょに走るわけでもなく、声が大いいわけでもないのに、走哉は陸の存在感を、不在のときこそ余計に感じる。田村たちは、昨日のちよっとしたいさかいなど、まるでなかったかのように振る舞っていた。

だれもが口数少なく、肃々と時間は過ぎ、あっという間にクールダウンの時間になった。今日はパソコン部も遅くまでやっているのか、この時間になっても陸はグラウンドに姿を見せなかった。

部室で着替え終わって校門を出たとき、走哉は、一心と偶然肩を並べて歩いているのに気付いて、びっくりした。一心も走哉をちらっと見て、肩をひいた。

いつもは陸と話しながら着替えているから、さっさと着替えて帰ってしまう一心といっしょになったことはない。気まずい空気が、ふたりの肩先に流れた。

かといって、振り切って早く歩くにも、わざとゆっくり歩くにも、距離が近すぎて不自然すぎた。

一心の家がどこか知らないが、早く分かれ道が来ればいい、と願った。

陸が追いかけて来ないかと、走哉は後ろを何度も振り返った。

「お前んち、こっちなんだ」

意外にも、一心から口を開いた。

「う、うん。まだまだずっと先だけど」

「遠いんだ？」

「中央公園のそばのマンションが陸んちで、おれのうちは、あそこよりはもうちょっと手前」

「へえ。このへんの学校って学区が広いんだな」

走哉はふっと笑った。

「じゃなくて、おれと陸は越境通学してるから」

「越境？　なんで？」

「言いたくなくて、ちょっと間ができた。走哉はまっすぐ前を向いたまま、淡々と答えた。」

「ほんとに上郷一中ってところが学区なんだけど、陸上部がなかったから」

反応を見なくても、となりで驚いている様子が、なんとなく伝わってきた。

「一之瀬も？」

「いやあ、陸はパソコン部に入りたくて。いろいろわけがあって、陸上部は途中から入ったんだ」

そのわけを思い出して、走哉の口もとがほころんだ。陸はマネージャーとして部員に加わり、廃部の危機を救った立役者なのだ。

「陸上部に入りたくてか。ふうーん」

ふうーん、の中に嘲笑が含まれていそうにないことに、走哉は心の中でほっと息をついた。

「駅伝……駅伝やりたくてさ」

「駅伝？」

一心がオウム返しにたずねた。

「うん」

「駅伝なんて、考えたこともねえ」

「なんで？ あんなに速いの？」

上体を引くようにして、走哉は一心の方を見た。

「なんか、たすきつなぐとか、そういうの、ちょっと、なんかな」

一心の答えは、走哉にはよく分からなかった。

沈黙がしばらく流れた。

③いつも走ってばかりのふたりなのに、なぜか一步一步踏みしめるように、すぐくゆっくり歩いていた。

「あ、おれ、ずっと聞きたかったんだけど」

走哉が思い出したように言うと、一心が首をかたむけた。

「シューズさ。いつも履いてる水色のランニングシューズ。あれ、どこで買った？」

「おれの？」

「そう。ちょっとかっこいいなって思ってたんだ。実はネットとかで調べただけど、なかなか見つからなくて。やっぱり高いの？」

「いや、お前にはまだ早いだろ」

無遠慮な言葉に、走哉の肩甲骨がすっと落ちた。

「……ごめん」

走哉の両肩がぽんと上がった。

「今、なんて言った？」

④「や、なんも言ってねえし」

あわてたように、一心が首を振る。

しばらくして、走哉が口を開いた。

「おれの父さんってさ、スプリンターだったんだよ。インターハイにも出たことあるんだ」

「へえー」

「意外だろ？」

「んなこと、だれも言ってねえだろ」

「おれんち、小四の妹がいるんだけどさ。結構、足速いんだよ。もちろん、辻とは比べものにならないと思うけど。おれの父さんの運動神経は、妹だけに遺伝したんだって、ずっと思ってた。いや、今も思ってる、かな」

「へえ……そう」

「才能なんだよね。うらやんでも仕方ないけど、やっぱりうらやましいな」

走哉は、住宅街のずっと先の空を見つめて、つぶやくように言った。

「でも、」

走哉は一度言葉を切った。

「おれには、だれにも負けないものがある」

突然、一心が立ち止った。

走哉が振り返ると、一心は立ち止ったまま、走哉の次の言葉を待つように走哉の目を凝視した。

「走るのが好きだっていう気持ち。この気持ちだけは、きっとだれにも負けない」

「……」

「どんなに打ちのめされても、どんなにつらくても……これからもずっと、走り続けるんだろうな」
その場に立ちつくす一心をおいて、走哉は歩き出した。

一心は我にかえったように、早速で走哉の横に追いついた。走哉は前を向いたまま、口を開いた。
「なあ、お前の父さんも、やっぱ陸上やってたの？」
一心の頬がびくりと動いた。

「知らね」

そっけない返事に、走哉はたじろいで一心の顔をうかがうと、

「おれ、こっちだから」

そう言って一心は、逃げるように通りを曲がって行ってしまった。

⑤ 一心の心は、かき乱されていた。

いつか石井が言っていた、走哉がだれにも負けないものというのは、走ることが好きだという気持ち、だったのだろうか。

おれは、どうなんだ？

「走るのが好き」なのだろうか？

それとも、石井に言われたみたいに、才能に走らされていただけなのだろうか？

本当は、どうなんだ……。

自分の気持ちなのに、うまくつかめないもどかしさに、心の中が悶々とする。

何度も何度もぺしゃんこにされて、それでもまだ起き上がってくるあいつ……。

——走哉。

才能に恵まれていないって、自分でわかっているのに。

一心は下を向いて歩きながら、才能、とつぶやいてみた。

「才能だけは手に入られない。お前だけが両親から授かった宝物だ」いつか笹木中の加藤に言われた言葉が、ふとよみがえった。

最近思い出していなかった、父さんの顔を想い描いてみた。

父さんは、どんな中学生だったのだろうか？

やっぱり走っていたのだろうか？

立ち止って、たいして汚れてもいないのに、学生ズボンのほこりをはらった。

ななめがけにしたスポーツバッグの肩ひもが、鎖骨に食い込む。

静かに息を吐き切ってから、一心はまた歩き出した。

(佐藤いつ子『駅伝ランナー』)

注1 陸はパソコン部の日だ。一ノ瀬陸は走哉の小学校時代からの友人。パソコン部に所属しながら、陸上部のマネ

ージャーもしている。

注2 いさかい。言い争いやけんかのこと。

注3 肅々と。静かにひっそりした様子。

注4 越境通学。決められた学区の境界を越えて、別の学区の学校に通うこと。

注5 嘲笑。ばかにして笑うこと。

注6 肩甲骨。両肩の骨。

注7 スプリンター。陸上の短距離走者。

注8 インターハイ。高校生の全国大会。

注9 石井。走哉と同じ陸上部の生徒。

注10 加藤。笹木中の陸上部員。

問1 〰〰〰線①②③の漢字の読み方を、ひらがなで書きなさい。

問2 〰〰線Ⅰ「胸をなでおろした」、Ⅱ「たじろいで」の本文中の意味として最も適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

Ⅰ 「胸をなでおろした」 ア 気がかりな状況^{じょうきやう}を避けられて、喜んだ。

イ 予想とは違う出来事^{できごと}に、緊張^{きんちやう}した。

ウ 心配したことが解消して、安心した。

エ 思い通りになったことで、満足した。

オ 不安が解決したことに、感動した。

Ⅱ 「たじろいで」

ア 悲しんで

イ むくれて

ウ しおれて

エ ひるんで

オ 満足して

問3 〰〰線①「すうすうすきま風が吹いているような感じだった」とありますが、走哉はどのように感じているのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選んで、記号で答えなさい。

ア そばにいてくれるだけで心強く感じられる陸がいなかったため、いつもとは違うさびしさを感じている。

イ いつの間にか二人で練習することに慣れてしまい、陸がいないとやる気が出ないように感じている。

ウ 陸上部の活動に集中してほしいという走哉の気持ちに気付かない陸の鈍感^{どんかん}さに、不満を感じている。

エ いつもみんなのことを支えてくれる陸がいないので、部員たちに元気がないように感じている。

問4 〰〰線②「言いたくなくて、ちょっと間ができた」とありますが、なぜ走哉は言いたくなかったのですか。その理由を五十字以内で説明しなさい。(、や。もふくみます)

問5 〰〰線③「いつも走ってばかりのふたりなのに、なぜか一步一步踏みしめるように、すぐゆっくり歩いていた」とありますが、どういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 相手のことを知ろうと話をしたのに、分かり合えず重苦しい空気になり、足取りまで重くなってしまったという事。

イ 気まずい空気のなか走って帰ると相手に嫌な思いをさせるだろうと、互^{たが}いが相手に対し気をつかっているという事。

ウ 話をするうちに、互いに相手のことをもっと知りたくなり、自然と歩く速度がゆっくりになっていったということ。

エ 互いに自分の陸上への情熱を相手に分かってもらうために、じっくり話し合う時間を作ろうとしているということ。

問6

——線④『や、なんも言ってねえし』あわてたように、一心が首を振る」とありますが、このとき一心はどのような気持ちだったのですか。「走哉」という言葉を必ず使い、四十字以内で説明しなさい。(、や。もふくみます)

問7

——線⑤「一心の心は、かき乱されていた」とありますが、この時の一心の気持ちの説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 自分の陸上への思いが走哉に負けていると分かっているのに、どうしても素直に認められず、落ち着きを失っている。

イ 走哉の陸上への思いを聞いて、自分の陸上に対する思いがどのようなものか分からなくなり、気持ちが動揺している。

ウ 父のことを憎んでいたが、自分に誰よりも速く走る才能があるのは父のおかげだと気づき、複雑な気持ちになっている。

エ 石井の言葉で、自分は親からあたえられた才能に走らされているだけの情けない人間であることに気づき、混乱している。

オ 自分に走る才能がないことを分かっているながらもあきらめずに陸上への情熱を持ち続ける走哉に、恐怖心をいだいている。

解答用紙

得 点

(29—M)

問
7

問2	(d)	(a)
	(e)	(b)
		かな
A		(c)

問
2

A
B
C

[illegible]

問5

[illegible]

①	た	し		
②	う	こ		
③	は	ぐ		
④	も	て		

⑤	へ	こ		
⑥	し	お		
⑦	あ	し		
⑧	お	び		

①	
①	
②	
③	
④	

②	
①	
②	
③	
④	

①	
②	
③	
④	

問 2	Ⅰ	(a)	(e)
	Ⅱ	(b)	
問 3		(c)	
		(d)	

[illegible][illegible]

Figure 1